

サヴァチェが神奈川県で採集した植物標本

たなかのりひさ
田中徳久 (学芸員)

1853 年、ペリー艦隊が開国を迫って来航し、時代は明治維新へと向かいます。そのような時代の流れの中、日本産の植物は、ペリー艦隊の随員であったウィリ



図 1 パリの自然史博物館の植物標本庫の外観。



図 2 自然史博物館の植物標本庫の内部。

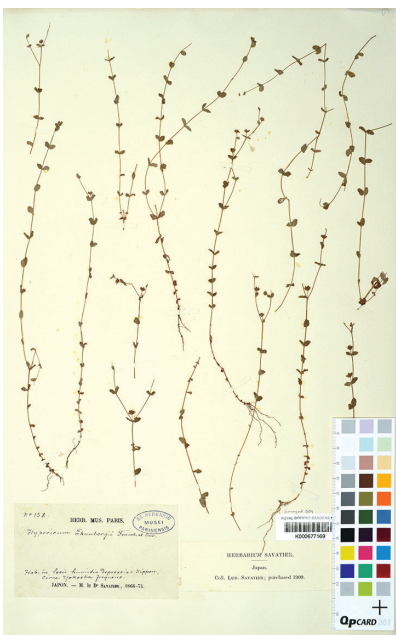


図 3 キュー植物園所蔵のコケオトギリの標本 (Savatier, No. 158, K000677169)。
図 4 に示した標本の重複標本。

アムスとモロー、ライト、スモールやロシアのマキシモヴィッチ (1860 年に来日) と助手の須川長之助^{すがわちのすけ}、フランスのサヴァチェ (Paul Amédée Ludovic Savatier; 1866 年に来日) により採集され、それぞれ本国の植物標本庫に残されています。これらの中で、特に神奈川県に所縁が深いのは、横須賀に設立された官営製鉄所の医官を務めたサヴァチェが採集した標本です。

サヴァチェは勤務の合間に横須賀や横浜、鎌倉などで植物を採集し、標本をパリにあるフランス国立自然史博物館に送るとともに、私設の標本庫にも収蔵しました (後にロンドンのキュー植物園に収蔵; 図 3)。また、1880 年には、当時、パリのドレイクの私設植物研究所にいたフランシエの元に送っていますが、この標本は、その後、自然史博物館に収められたため、パリの自然史博物館にはサヴァチェの標本がかなり重複して収蔵されています (大場秀章, 2003. シーボルトの 21 世紀, pp. 119-129; 図 4)。

サヴァチェが採集した植物標本を研究したフランシエは、サヴァチェと共著で『日本植物目録』(1873-1875, 1877-1879) を著しています。サヴァチェが採集した標本

は、この著作の中で新種記載された多くの植物のタイプ標本となっています。その中には、神奈川県内で採集された標本も多く見受けられ、これらの標本をタイプ標本とする植物は、200 分類群を超えます。

また、サヴァチェが採集した標本は、タイプ標本として、植物分類学的に重要であるだけでなく、江戸時代末期から明治時代初期の日本の植物分布の証拠ともなり、地域植物相の生物多様性の基礎資料としても重要です。具体的には、横須賀で採集されたノグサなどはその代表例で、タイプ標本 (Savatier, No. 1396, P00076944) とここで示した標本 (Savatier, No. 1399, P00076945; 図 5) の 2 点のみが神奈川県で採集された標本として知られています。この他、現在の神奈川県では絶滅し、標本が確認されていなかったチョウジソウの標本 (Savatier No. 836, P03521656) も見出されました。これらの標本は、今は失われた植物が分布していた証拠であるとともに、これらの植物が生育していた良好な自然環境が存在していたことを示唆しています。

なお、本稿で紹介した標本の一部は JSPS 科研費 23501234 の助成により調査したものです。



図 4 コケオトギリの標本 (Savatier, No. 158, P) 部分。D・E に「HERBIER E. DRAKE」のラベルが貼られています。

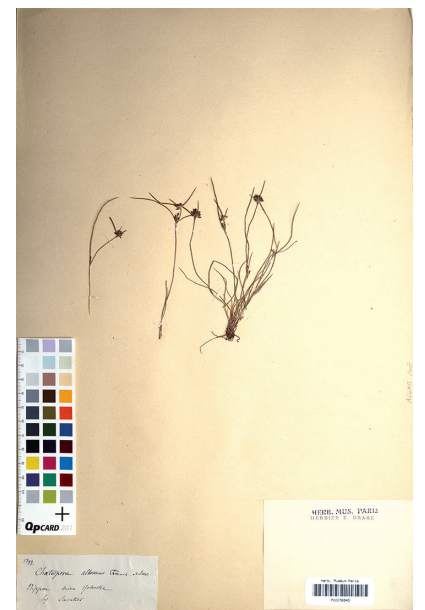


図 5 ノグサの標本 (Savatier, No. 1399, P00076945)。基準標本以外に知られている神奈川県で採集された唯一の標本。